



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シンポジウム・セミナー III : 現代の韓日関係をどう見るか? : 歴史から共生共栄の知恵を学ぶ
Author(s)	鄭, 在貞
Citation	年報 公共政策学, 8, 21-31
Issue Date	2014-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59387
Type	other
File Information	ASSP8_004.pdf



シンポジウム・セミナー III：

現代の韓日関係をどう見るか？

－歴史から共生共栄の知恵を学ぶ－

かつて東北アジア歴史財団理事長、日韓歴史共同研究委員会研究委員を務めるなど、韓国を代表する歴史学者として知られ、2013年12月から2014年2月まで北海道大学公共政策大学院教員を務めた鄭在貞・ソウル市立大学校教授が、2014年1月17日、現下の日韓関係に関する講演を行った。以下、この講演の概要を掲載する。

報 告 者

鄭 在貞 （北海道大学公共政策大学院附属公共政策学研究センター研究員、
ソウル市立大学校教授）

開催日時

2014年1月17日（金）16：30～18：30

場 所

北海道大学百年記念会館大会議室

■ 報告

現代の韓日関係をどう見るか？

ー歴史から共生共栄の知恵を学ぶー

北海道大学公共政策大学院附属公共政策学研究センター研究員 ソウル市立大学校教授

鄭 在貞

1. 「冷戦」に直面した韓日関係

2012年8月以来悪化した韓日関係が2014年の初めに入っても改善される兆しが見えない。政府同士の衝突が民間部門にまでよくない影響を与え、国民の間の感情も回復するのが難しいほど悪くなっている。

2012年11月末、日本の内閣府が発表した「外交に関する世論調査」(2012. 9. 27 - 10. 7調査)の結果によると、韓国に対して「親しみを感ずる」と答えた日本人は39.2%で、前年(62.2%)に比べて23.0%も下がっている。1999年以降、初めて韓国に対して「親しみを感ずらない」という答えが「親しみを感ずる」と答えた比率を上回った。韓日関係についても「良くない」という答えが78.8%で、昨年より42.8%も急増した。

『韓国日報』と『読売新聞』が共同で実施した「2013韓日国民意識世論調査」(2013. 3. 22 - 24調査)の結果は、状況がさらに悪化したことを示す。日本国民の中で、「韓国を信頼できる」と答えた人は31.6%、「韓国に親しみを感ずる」人は40.9%であった。一方、韓国国民の中で「日本を信頼できる」と答えた人は19.0%、「日本に親しみを感ずる」人は17.3%に過

ぎなかった。「韓国と日本の関係が良い」と答えたのは、韓国が18.2%(2007年37%、2010年24.2%)、日本が17.2%(2007年72.3%、2010年57.0%)であった。両国とも5人のうち1人にも及ばない。

韓国と日本の専門家やマスコミは、両国の政府・民間の関係がこのように急激に悪化した最大の原因として、2012年8月の李明博大統領による独島訪問、天皇に対する謝罪要求発言、日本の地位低下発言などを挙げるのが普通である。実際に、両国政府と国民は、李大統領の行動と発言をきっかけに、にわかにぎくしゃくした関係に陥った。両国の政府は異常な局面を打開するために努力したが、その過程でむしろ激しく対立し、状況はさらに悪くなった。両国民も意外な出来事に驚きながらも、自分の政府の対応に従わざるを得ない羽目になった。その激震はあまりに強く、その余震は両国の政権が変わった(ハンナラ党の李明博政権からセヌリ党の朴槿恵政権に、民主党の野田政権から自民党の安倍政権へ)後も続いている。米国の著名な韓日関係の専門家であるビクター・チャは、韓国と日本のこのような関係をチューニングが不可能な壊れた楽器に例えて、両国は今、「冷

戦」の状態に置かれていると憂慮した。

しかしながら、少し冷静にまたより長期的な視線で、特に近現代の韓日関係の歴史から見れば、今回の出来事は、潜んでいた溶岩が地殻の変動によって噴出したことにすぎない。韓日関係はもともと管理をお粗末にすると、壊れやすいガラスの器のような不安な状態に置かれていた。もう少し誇張していえば、些少な不注意でも火さえつけばいつでも爆発するガスタンクのような状況だった。ただし、今回は従来とは異なり、韓国が原因を提供したといっても仕方なく、そのうえ、管理の最高責任者である大統領がむしろ喧嘩の種をまいたと批判され、亀裂の衝撃と津波がさらに大きくならざるを得なかった。

韓日関係が慢性的に不安な状態に置かれた背景には、日本の韓国侵略と支配に対する謝罪と賠償（いわゆる歴史認識と「過去の出来事」の処理）などをめぐる葛藤が介在している。両者の懸案事項が浮上すると、韓日関係は常に緊張局面を迎える。韓国と日本がじょうずにやり取りをしてその懸案をうまく片づけると、韓日関係は安定するが、よくない方法でお互いにぎくしゃくすると韓日関係は急速に不安定になる。時には冷水（水）から温水（湯）へ、温水（湯）から冷水（水）へ変わっていったのが決まったパターンであった。

今回も、李明博大統領が独島を訪問する前に、韓国と日本は、首脳会談で「日本軍慰安婦」問題の解決をめぐって攻防を繰り返した。それによって形成された気まずい関係が、両国で政権が変わった

にもかかわらず改善されていない。むしろ、朴槿恵大統領と安倍晋三首相は、「日本軍慰安婦」、「侵略戦争」、「独島領有権」、「靖国神社参拝」などの問題についてぶつかり合う所信を披露することで、雰囲気さをさらに頑ななものにした。残念なことは、お互いに顔を合わせ、心を開いて話し合えばよいのに、マスコミや国会答弁などを通じて自分の考えを披瀝する空中戦を繰り返している模様である。したがって、首脳会談はまだ見通しが立たない。

韓日両国首脳の見識と「過去の出来事」の処理についての信念は、自国の国民から相当の支持を受けているので、簡単に変えることができないのが現実である。先の「2013韓日国民意識世論調査」によると、韓国国民の82.1%は「日本の植民地支配が今も韓日関係の発展に支障をきたしている」と回答したのに対し、日本国民は64.7%が「そうである」と答えた。日本の首相の靖国神社参拝について、韓国国民は84.7%が「適切でない」と回答しており、日本国民は65.7%が「適切である」と答えた。李明博大統領の独島訪問について、韓国国民は67.0%が「適切である」と答えたのに対し、日本国民は85.8%が「適切でない」と答えた。

歴史や領土などの問題をめぐる韓日両国の国民の認識の差には、このように広く深い溝がある。したがって、両国の指導者の先導的努力と国民の積極的な呼応がない限り、韓日関係の危機は今後もかなり長く続くだろうと思われる。

2. 韓日の国交再開50年を迎える感想

韓国と日本は1965年「基本条約」とこ

れに関連する「付属協定」を締結することにより、1910年の「韓国併合」（大日本帝国による大韓帝国の廃滅）で断絶した国交を再開した。その間の35年間、韓国は日本の植民地支配を受けた。そして、日本の敗戦と韓国の解放後の20年間、両国は正式な外交関係を結ばなかった。敗戦・解放のあと、日本と韓国はアメリカとそれぞれ安保同盟を結ぶことで、東アジアで反共の堡壘の役割を果たした。そして同じく自由民主主義と市場経済体制の道を歩んだ。

韓国と日本は2015年、国交再開50周年を迎える。いつのまにか国交断絶の期間（1910－65年）とほぼ同じ歳月が流れたわけだ。半世紀の時間が経つ間、韓国と日本は自由、民主、法治、人権、平和などの価値観を共有しながら、政治・経済・社会・文化などで非常に密接な関係を結んできた。西洋人などの第三者から見ると、韓国と日本のように人種、社会、生活、文化などがお互いに似ている国も珍しいようである。壮大なスケールで、世界文明の興亡盛衰を探究したアメリカ（UCLA）のジャレド・ダイヤモンド教授は、自分の名著『銃・菌・鉄』で、韓国と日本を「双子の兄弟」のような間柄だと見なしているほどである。

韓国と日本が世界のレベルから見ると、「双子の兄弟」のように密接な関係であるにもかかわらず、両国はなぜ首脳会談さえ開くことができないほど不便な関係になったのか？そして、両国の国民は、なぜお互いに信用できない嫌いな感情をもつようになったのか？だとすると、サッカーのワールドカップを共同で開催し、

“韓流”と“日流”をかわし互いの大衆文化を一緒に楽しんだ友好と親善の波は虚像だったのか？また、日本の技術と資本の提供で韓国において浦項製鉄（POSCO）を建設し、両国市民の連帯運動を通じて日本の歪曲された歴史教科書の記述を是正したという交流と協力の実績は何でもなかったのか？韓日の国交再開50周年という歴史の節目を控え、いままでも両国の関係を支えてきた「1965年体制」がより一層強固になるどころか、むしろそれが崩れていく音があちこちから聞こえるような感じがする。

私は、恐縮ながら、過去20年あまりの間、韓国と日本の歴史認識の差を埋めるために官民両方で歴史対話を進めてきた。いま「歴史問題」をめぐる、韓国と日本が真正面から対立する「危機」を目撃しながら、私は自分の力不足にむなしさと恥ずかしさを感じている。しかしながら、同時に次のような疑問と反省を抱かざるを得ない。

韓国と日本の国民はある種の先入観や偏見を持って、韓日関係の歴史を見てこなかったか？いや、お互いがいかに広く深い関係を結んできたのか、その歴史をほとんど知らないのではないのか？また、分らないことを知ったかぶりをして、間違った知識を正しいかのように確信して騒いできたのではないのか？韓日関係の歴史は紆余曲折と多事多難に満ちているので、どちらか一面だけを取り上げて見ても全体像をしっかりと把握することができないのではないのか？今の韓日関係を規定する敗戦と解放の後の現代の韓日関係の歴史さえ、世界との関連の中で、長

期的・マクロ的観点から総合的に把握しない限り、もともとの姿を描き出すことができないのではないかと。したがって、韓日関係の歴史をバランスの取れた視点から真実に基づいて再構成し、両国の国民に提供することこそ、危機に瀕している昨今の韓日関係を改善するために必ず必要な作業ではないか？

3. 現代の韓日関係を見る視座

私が今回皆さんの前で行う「現代の韓日関係をどう見るか？－歴史から共生共栄の知恵を学ぶ」という講演は、上記のような自問自答の過程で準備されたものである。そのため、私の講演の中身には自らの問いに答えるような内容が含まれていると思う。ただし現代の韓日関係に関する模範的な通史がほとんどない学界の現実を勘案すると、私の講演自体が私の偏見を表すことにすぎないかもしれない。

ここでは、とりあえず現代の韓日関係の歴史を把握する私なりの観点を紹介することから始めたい。これをもって、聴衆の皆さんが講演に臨む私の問題意識を理解してくだされば幸いと思う。

第一に、長期史的・文明史的観点を念頭に置く。歴史の中の韓日関係は2500年間にわたるほど長く深い。その過程で、韓国と日本はお互いに影響を取り交わして文明を形成してきた。文明の伝播と受容による文明の転換は、暴力と強制によってなされた時もあるが、平和と交流によってなされた時もあった。現代の韓日関係の70年（1945～現在）、もっと伸ばすと近現代の韓日関係の140年（1875～現

在）は、どのような位置と性格を持っているのか？私は韓日関係の長い歴史の中から、近現代の韓日関係史の特徴を把握しなければならないと思う。

第二に、複合的・重層的な関係を重視する。通常、韓日関係を語るときは、政治や経済、または歴史や文化などのどちらかの一側面に偏りやすい。しかし、韓日関係にはいろいろな問題が複雑に絡み合っているので、一面だけを見て、韓日関係の全体を裁断することはできない。したがって、この講演では、韓日の人間の移動と文化の接触、戦争の衝撃と社会の変動、物資の交易や生活の変化などの様々な側面を念頭に置きたい。しかし時間の制約で具体的な話はできないかもしれないので、韓日関係を複眼的に把握しようとする私の観点だけは理解していただきたい。

第三に、現在的・模索的な観点を堅持する。韓日両国の間には、古くて新しい懸案が常に発生する。100年前、50年前に両国が激しく論争した歴史認識や、「過去の出来事」の整理（戦後処理）の問題が、今日も依然として新たな課題として浮上しているのが良い例である。したがって、この講演は、これらの問題に対して、現在の視点から、その来歴を追跡し、また、その問題の克服を模索する姿勢を持ちたい。「すべての歴史は現代史である」という言葉が韓日関係史のようにうまく当てはまる場合も珍しい。

第四に、交流協力と相互依存の観点も重視する。一見すると、現代の韓日関係は反目と対立でいっぱいであるようだ。しかし、実際にはほとんどの時期は、交

流と協力の道を歩んできた。その結果、今日の両国関係はそれぞれの分野で交流協力と相互依存の関係が非常に深まった。韓国と日本では、この面に対する評価が非常に低い。いや、両国の国民はその事実さえもよく知らないかも知れない。中国の強盛、北朝鮮の脅威、南北の統一などを勘案すれば、韓日の交流と協力は、今後さらに必要である。そのような未来を見越しながら、この講演では、政府のレベルだけでなく、国民レベルの交流と協力にも注意を払うつもりである。

2015年は、韓日の国交再開50周年である。この歴史の節目を控え、韓国と日本では韓日会談や韓日条約を再照明する学術会議や論文論説がブームとなるだろう。新聞や放送も多くの特集記事や特別番組を作ることが確かだ。私はそのような試みが、少なくとも70年から140年にわたる近現代の韓日関係の歴史の全体を視野に入れ、様々な角度からバランスを取った感覚で成り立つことを願ってやまない。私がこの講演で披露する所見が彼らに小さい標にでもなれば幸いだと思う。特に韓国と日本のマスコミは、両国の国民の相互認識を形成するために多大な影響を与えるため、どのような視点と姿勢で韓日関係を扱うのが非常に大切である。

もう一つ、学校教育で現代の韓日関係の歴史についてほとんど学ばない若者たちにも、この講演が取っ掛かりとなることを望む。中・高等学校の韓国史の教科書は近代韓日関係（1875 - 1945年）については、50余ページも記述しているが、同じ70年間に該当する現代韓日関係（1945 - 現在）については1ページさえ記

述していない。現代の韓日関係の歴史をおろそかに扱うことは、日本の学校教育も同様である。そのため、両国の国民は、現代の相互関係について無知と誤解、偏見や歪曲の泥沼から抜け出しにくい構造の中に閉じ込められていると思われる。この講演が、現代の韓日関係の歴史に対する学校教育の限界を克服し、危機に直面した韓日関係を改善するための細い糸口にでもなれば幸いである。

4. 現代韓日関係史の段階別特徴

1945年の日本の敗戦と韓国の解放で両国は帝国と植民地の間柄から脱皮し分離独立した。別の国として歩んで70年、「韓日条約」の締結で両国が国交を再開してから早くも50年の歳月が流れた。この期間中、韓国と日本は国内外の情勢の変動に連動しながら、紆余曲折に満ちた複雑多端に絡み合った近隣関係を結んできた。その軌跡の詳しい内容は、もうすぐ出版される拙著『主題と論点で読む20世紀韓日関係史』を参照にしていきたい。この席で一つ強調したいことは、敗戦と解放後の韓日関係も体系的・総合的に整理しておくべき歴史になったという点である。それも韓国と日本の両国民が相互理解を深めるためには欠かせない、必要性和重要性が非常に高いテーマになったのである。

世界との連鎖を見極めながら、韓国と日本の国内外の情勢などを総合的に視野に入れて、過去70年間の現代の韓日関係の歴史を総括するとどのような姿を描くことができるのか？ だいたい次のようないくつかの段階を経て韓日関係の歴史は

性格と位相が変化してきたといえるだろう。

第1期（1945－1965年）は、韓国と日本が植民地支配による負の遺産つまり「過去の出来事」を処理した国交を再開するための道を模索した時期である。米国の中心とした連合国は、日本とサンフランシスコ講和条約を締結し、アジア・太平洋戦争の処理を終えた。韓国と日本はその枠組みの中で、14年にかけてマラソン会談を展開した。いわゆる「韓日会談」がそれである。「韓日会談」は、歴史認識や「過去の出来事」の処理などをめぐる見解の差を狭めることができず、難航を重ねた。韓国では、自由党、民主党、共和党と政権が交替し、日本では、自民党一党集権体制が構築された。韓半島（朝鮮半島）で韓国戦争（朝鮮戦争）が起こり、国が減じる寸前まで追い込まれたが、日本は韓国戦争の特需で敗戦の惨めさから完全に脱出した。冷戦の雰囲気世界を覆い、韓国と日本はアメリカの同盟国として反共の砦になった。また、アメリカの圧倒的影響の下でともに自由民主主義と資本主義体制への文明転換を遂げた。

第2期（1966－1979年）は、韓国と日本が経済面で垂直的な分業関係、政治面では非公式的な癒着関係が多かった時期である。日本が優位に立ち、韓国は日本に助けを求める非対称的な関係が続いた。韓国と日本は「韓日条約」を締結し、一応「過去の出来事」を処理し、対等な国として国交を再開した。韓国は「請求権資金」と連携して、日本の資本と技術を導入し、経済開発に拍車をかけた。その成果もあって、韓国は新興工業国の先頭

に浮上し、外国から「漢江の奇跡」という賛辞を得た。これを後押ししたのが、韓国では開発独裁・権威主義、日本では自民党一党優位の政治体制だった。両側は帝国と植民地という戦前の体制が作り上げた人脈と金脈で結ばれた面も少しはあった。日本とアメリカが中国と修交するなど、東アジアの国際情勢が変動したが、韓半島で南北の対決、東南アジアでベトナム戦争でもわかるように、世界はまだ冷戦の雰囲気につつまれていた。

第3期（1980－1997年）は、韓国と日本が経済面で垂直的な分業関係から少しずつ脱して相対的に水平化の段階に入りつつあった時期である。韓国が日本から素材と設備を導入して輸出する貿易構造は相変わらずだったが、資本と技術の面で、日本への依存度は著しく低くなった。世界の舞台で日本企業と市場を争う韓国企業が増えている。政治面でも戦前の世代同士の癒着から離れて次の世代へ移りつつあった傾向が見られた。世界が冷戦から脱皮することで、韓国と日本の反共連帯も弱くなった。韓国では政治の民主化と社会の多元化が著しく進展した。そのせいもあって、韓国では権威主義の時代に抑えられた反日ナショナリズムが時々噴出した。そのかわり、日本を知りまた克服しようという動きも起こった。日本では、自民党一党中心体制が崩れて、自民党中心の連立政権が出現して歴史認識などをめぐり、前進と後退を繰り返した。ソウルオリンピックなどをきっかけに、日本人の韓国に対するイメージにも肯定的な変化が現れた。日本の国力が足踏みする反面、中国の勢力が強大になり、

東アジアの国際情勢に大きな変動が起り始めた。

第4期(1998-現在)は、韓国と日本が比較的均等化の段階へと移行し始めた時期である。1990年代の初めに、日本の12分の1に過ぎなかった韓国の国内総生産額は、2012年現在で5分の1になるほど、その格差は大幅に縮まった。韓国の対日貿易依存度は1965年の輸出25.5%、輸入37.8%だったが、2012年には輸出7.1%、輸入12.4%と著しく低くなった。韓国の企業が世界市場で日本の企業を越えたり、韓日合作で世界市場へ進出する事例も登場した。スポーツや芸術などの面でも、競争を繰り広げる場合が増えた。韓国では、選挙による与野党の政権交代が実現され、民主主義が根を下ろし、市民運動も過度といわれるほど盛んになった。日本では、ひととき野党である民主党が政権を握ったが、国民の支持を失って、自民党独走の保守政治に回帰した。そして、歴史認識と領土問題などをめぐって韓国と日本が露骨に対立する状況が現れた。反面、人々と文化などの往来と交流は増えるばかりで、一年に550万人の人々が行き来し、一週700便の飛行機が両国の間を飛んでいる。1965年のそれは、各々1万人、数便だった。2002年のワールドカップの共催を前後して両国では韓流と日流ブームが起った。両国の国民は相手国の大衆文化を楽しみ、生活と意識の面でも通じ合う傾向が強くなった。北朝鮮の日本人拉致、核実験、ミサイル発射などで韓半島周辺の国際情勢が緊迫する中、日本は(国防軍を保有し自衛権を行使できる)普通国家を目指す動きを急いでいる。

中国の台頭をにらんでアメリカは東アジアを重視する方向に転換し、日本もその流れに乗って政治・経済などの体制を再整備している。東アジアの国際情勢にかなり不安定な面があることを否定できない。

5. 韓国と日本の位相の変化をとらえる見方

韓国と日本が現在歴史問題をめぐって直面している葛藤と対立を長期的・マクロ的な観点から見ると、時代の流れに沿って変わりつつある両国関係の性格と位相の変化を反映する一つの通過儀礼と言える。100年前に日本の植民地に転落した韓国は、粘り強い独立運動のあげく70年前に解放を成し遂げた。そのあと国土と民族の分断という悲劇を乗り越えて、紆余曲折と波乱万丈の末、今は非常に限られた分野ではあるが日本に近づく段階まで発展した。

韓国のことわざに「クジラの喧嘩でエビの背中が裂ける」という言葉がある。100年前の韓国は、列強のクジラの戦いに巻き込まれて命を失ったエビの身の上に過ぎなかった。100年がたった今も、韓半島周辺の国際情勢は、列強のクジラの競り合いが激しい。しかし、100年前と違うものが一つある。韓国が今やクジラのけんかで背中が裂けるエビの身の上から脱したことである。今の韓国は、列強のクジラがいかに戦っても、あちらこちらに泳ぎながら自分の命を守るぐらいの実力は持っている。イルカほどには成長したと思われる。もし、南北が統一されると、韓国はクジラとまではいかなくてもミン

ククジラぐらいには大きくなるだろう。これが私のいわゆる「イルカ史観」である。

ところが、日本は過去20年間政治の混乱などもあって、内外の問題の克服が遅くなった。その過程で国力の勢いに陰りが出てきた。一方、中国は経済・軍事などの面で、日進月歩して強大国家として浮上した。それに伴い、過去120年あまりの間、東アジアで圧倒的優位を見せた日本の影響力は相対的に低下する現象が現れた。国際秩序の再編成の中で、韓国と日本の関係も、従来の一方的な従属・依存の関係から脱して相対的な対等・競争の関係に変わりつつあるようになった。長年の間、名残を残してきた植民地対帝国の垂直的・非対称的な関係はもはやさりつつあり、パートナー対パートナーとしての水平的・対称的な関係が次代に現実の姿として目の前に現れるようになった。

だからといって、韓国と日本の国力の差は今でも甚だしいことを忘れてはならない。韓国と日本を比較すると、様々な面で日本は相変わらず強大国である。国土で陸地の面積だけでも日本は韓国の4倍になり、海洋の排他的経済水域を含めたら数十倍にもなる。人口も3倍であり、国内総生産は5倍以上である。先端科学技術や文化芸術、社会安全網（セーフティネット）やインフラなどでは、日本は韓国が及ばないほどはるかに進んだ一流国家である。

韓国と日本の政治家やオピニオンリーダー、さらには一般国民もまず韓国と日本の現在の発展段階と国際的地位を正確

に理解する必要がある。同時に過去100年の間、韓日関係の性格と位相が大きく変わってきた来歴をはっきり認識しなければならない。両国の重要な人々が長期的・マクロ的な観点から韓日関係の歴史と現実をきちんと把握し、その時々​​の懸案に適切に対応してきたならば、韓国と日本は無駄な衝突や対立を相当減らすことができただろうと思う。

韓日関係の変化は当然歴史観と世界観の変化を伴う。特に1990年代以降、韓国では政治と社会の民主化が定着することにより権威主義体制の下で抑えられてきた民族主義的なエネルギーが日本に向かって噴出する現象が現れた。一方、日本では一時余裕としなやかさを見せた政治と社会の歴史認識が保守の方に傾くような現象が現れた。それによって「過去の出来事」の処理に消極的な動きが目立つようになった。韓国と日本はお互いに逆の方向に走り、靖国神社の参拝、「日本軍慰安婦」、歴史教科書の記述、「独島領有権」などの問題を巡ってぶつかり合うようになったのである。

韓国と日本は中国と北朝鮮に接する態度にも違いを見せる。中国は韓国にとって最大の貿易相手国であり、北朝鮮に対する影響力を持つ大事な国である。この点を考慮して、韓国は中国に低姿勢だと批判されても仕方なく接近しなければならない。韓国の切迫な事情を理解しがたい日本は、韓国が中国に傾くのではないかと訝るような目で見ている。日本はもっぱら東アジアで中国の影響力の拡大を懸念している。

韓国と日本はもともと地政学的・生態

学的な面でその位置が少し異なっている。歴史や文化などにおいて、アジア大陸と中国が韓国と日本に及ぼした相異なる影響をふり返ってみると両国の異なる事情と特色はよくわかるはずである。それは当然、今日の現実、またこれからの生存戦略を模索するにも一定部分影響を与えるに違いない。韓国と日本はお互いに相手の立場と対応の違いを認め合いながら、その相違をむしろお互いに役に立つ補完材として活用する必要がある。

1980年代以前には韓国と日本の間に葛藤や対立が発生した場合、両国の有力な政治家や財界のリーダーなどが前面または舞台裏で交渉し、妥結するメカニズムが作動した。しかし、歳月が流れるにつれ、人脈と金脈で「1965年体制」を支えてきた世代は韓国と日本の各分野から退いた。そのせいもあって、両国の間で摩擦や衝突が拡大しないように調整または管理するシステムも弱化し、ついに崩壊してしまった。韓国と日本がお互いの事情を察知し尊重し合うような特殊関係の遺風はほとんど消えて、何気ない他国と接するような普通関係の姿が現れた。“時すでに遅し”の感はあるが、韓日両国が必然的に到来する世代交代を直視し、次の世代を育成してお互いに利益になる知見と経験を伝授したならば、韓日関係はより安定したかもしれない。

6. 未来と世界に向けての韓日関係のあたらしいビジョン

繰り返しになるかもしれないが、韓国と日本は頻繁な摩擦や葛藤にもかかわらず、世界のレベルから見れば国交再開以

来の50年間切磋琢磨しながら、互いに利益になる、かなり刮目すべき成果を収めた。両国は民主主義、市場経済、法治主義、人権擁護、平和主義などのグローバルな価値を共有する同質の国を作り上げた。そして、それぞれアメリカの同盟国として東アジアの安全と平和を担保するテコとして機能してきた。また、国民の生活様式や文化水準でもお互いに先進性と普遍性を共有している。両国民の中に浸透した韓流と日流がそれを象徴している。したがって、韓国と日本が今までの成果を肯定的に評価し、これから積極的に協力の方法を模索すれば世界の文明の発展にも一緒に貢献できる道が開けるだろうと思う。

韓日関係の過去と現在を正確に理解し、また確固たる信念を持って将来へのビジョンを共有するならば歴史問題をめぐる葛藤と対立は解決できないはずがない。両国の国民はまず歴史問題の責任を次の世代に持ち越すことなく、今の世代で解決するという雰囲気をつくらなければならない。そして、両国の政治家やオピニオンリーダーは人類が目指してきた普遍的価値の基準から韓日関係の歴史を理解する見識を持たなければならない。さらに自ら率先して歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題を克服する意志と行動を見せなければならない。これと共に両国の国民を納得させてリードする戦略と方法を用意することも重要である。韓日両国は十分ではないが、歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題に取り組んだ経験とノウハウおよび実績を多く蓄積している。その努力と成果、限界と欠陥な

どを綿密に検討し評価することによって、補完と改善、克服と解決の知恵が生まれてくるだろうと思う。

韓日の間で歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題は重要ではあるが、これが両国関係のすべての部門を左右する唯一無二の事案とはいえない。他にも両国が協力して解決すべき問題は多い。歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題はこれらといっしょに取り組まなければならない事案である。ただし、歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題は両国の国民の情緒と感情、愛国心とアイデンティティなどと結びついた複雑で微妙な事柄を含んでいる。だからこそ、より多くの努力と時間、配慮と決断が必要である。

2015年には韓日国交再開50周年を迎える。せっかくあたる歴史の節目をきっかけに韓国と日本が両国だけでなく世界に向けて共同の未来ビジョンを提示し、その中で歴史認識と「過去の出来事」の処理の問題を包括的に解決することも一つの方法であろう。

最後になるが、前に紹介した著名な文明史家のジャレド・ダイヤモンドが書いた興味深い論文「日本人とは何者だろう？」（「日本人のルーツ」）の最後の一節を引用しながらこの講演を終わりにしたい。

“歴史は韓日両国の国民に相互不信と憎悪の余地を与えている。そのため彼らが歴史的にいかに密接な関係であったかを証明する結論を喜ばないだろう。まるでアラブ人とユダヤ人のように韓国人と日本人は血統がつながっているが、お互いに長年の伝統的な相互敵対的な感情を振り切ることができない。しかし、そのような対立と葛藤は両側に破壊的であるだけで利するところはない。確かに韓日両国の国民は幼年期を一緒に過ごした「双子の兄弟」と同じである。今、東アジアの政治的将来は彼らの間の長年のつながりを成功的に再発見することによって大きく左右されるだろう。”